様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３４３２０
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ１８２４８

研究課題名（和文）遺児へのグループによるグリーフケアプログラムの効果測定

研究課題名（英文）Measuring the Effectiveness of a Group Grief Care Program for Bereaved Children

研究代表者
倉西　宏（Kuranishi, Hiroshi）

京都文教大学・臨床心理学部・准教授

研究者番号：４０６２４２８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では遺児へのグリーフケアプログラムの意義とその持続的実施のための基盤構築に関して検討を行ったものである。死別体験が整理されるためには、死別だけではなくその人全体を理解し、その人全体が変化することをサポートすることが重要であることが見出された。そしてその人の人生全体の物語やナラティブという観点から理解と援助を行うことが重要であることが見出された。また「京都文教大学グリーフケアトポスCo＊はこ」というグリーフケア団体を立ち上げ、これらのグリーフケアの持続的実施に関する検討を行い、スタッフの確保と金銭面に関しての持続的活動が可能となるための課題が存在していることが見出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
遺児へのグリーフケアは社会的に広がりを示すことができていない。その背景には遺児が抱える困難性や援助に関しての知見不足ということが挙げられるだろう。そのため、本研究では遺児をどのように理解し、どのような態度で関わり援助を行うことが重要であるのかについて示すことができたことは意義があるだろう。また、実際に遺児支援活動やグリーフケア活動を行うための団体「京都文教大学グリーフケアトポスCo＊はこ」を立ち上げ、その活動を持続可能にするための課題を見出すことができたことも今後につながるものであると言える。

研究成果の概要（英文）：In this study, we examined the significance of the grief care program for orphans and the establishment of a foundation for its sustainable implementation. It has been found that in order for the bereavement experience to be organized, it is important to understand not only the bereavement experience but the whole person and support the change of the whole person. In other words, it was found that it was important to understand and assist from the perspective of the story and narrative of the whole life. In addition, a grief care organization called "Kyoto Bunkyo University Grief Care Topos Co * Hako" was set up to study the sustainable implementation of grief care. It was found that there were challenges to secure staff and enable sustainable financial activities.

研究分野：臨床心理学

キーワード：グリーフケア　遺児　死別　悲嘆　京都文教大学グリーフケアトポスCo＊はこ　物語　遊び　ナラティブ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（1）遺族への心理支援の必要性

遺族支援は、同じ遺族同士が支え合うセルフヘルプグループが中心であり、悲嘆への専門的援助に広がりを示すことができていない。しかし、近親者の死はライフイベントにおけるストレス強度では最上位に位置し(Holmes,T.H. et al 1967)、うつ病等の精神疾患や症状を生む場合もある(Bowlby,J.1980)。近年は「複雑性悲嘆障害」（(Prigerson et al.1995)という病態が示され、精神医学的診断基準の DSM-5 においても「持続性複雑死別障害」という診断基準も提示され（APA. 2013)、死別の専門的援助の必要性が述べられるようになった。しかし、遺族への専門的援助の実施とその知見の蓄積がまだ少ない(Shear.K et al.2005、中島他 2014,2016、など)。

（2）グリーフケアが持つ幅広い効果と意義

複雑性悲嘆は心身の健康を脅かすだけでなく自殺の危険因子ともされており(Latham,A.E. et al 2004)、遺族支援は自殺予防活動にも繋がる。2006 年に制定された自殺対策基本法においては自死遺児支援が内容に含まれているが、その遺児支援が自殺予防に直結するものであり、自殺対策基本法の目標への寄与ともなる。また、死別体験はその後の人間の感情面においては鋭敏性を与えるようになり(平島 1996)、さらに幼少期の死別体験が後年になって再燃し心理的不安定に至ることも指摘されている(岡田 2003)。ゆえに死別体験に取り組むことは精神疾患の予防効果や精神的健康に寄与することが示唆されている。

さらに死別体験への適切なケアがあることで、その後の人生をより有意義に生きることができること(Neimeyer,R.A.2001)、人格発達(渡邉・岡本 2006)や人間的成長(東村ら 2001)、を引き起こすことが述べられており、グリーフケアには幅広い意義が存在している。

（3）大学生遺児に焦点を当てた臨床研究

大学生遺児を対象とした専門的心理援助は、国内では見当たらない。そのため、実施方法や内容、そのプロセスや効果・意義が確認されていない。自死遺児に注目すると、自殺対策基本法が制定され自死遺児支援も目的に含まれているが（厚生労働省 2006）、全く取り組まれていない。ゆえに本研究で実施することが、今後の遺児支援の足掛かりになる可能性がある。

また、幼少期の親との死別の影響は遅れて現れる傾向があり(Worden.J.W.2008)、大学時代はその死別体験に向き合うことが多いと指摘されている(鳴澤 1993)。死別が青年期の課題であるアイデンティティの確立に関係しているためであり、心理発達の流れにも沿うことだと言える。

（4）量的データ・質的データの融合による分析

遺族研究の問題点は量的調査中心で検討されてきたことであり、そのため遺族理解の本質が見逃されてきたことが指摘されている（宮崎 2003）。本研究では、質問紙・心理検査による量的調査とインタビュー調査等の質的調査の両面から効果を提示する。そのことによって客観データと主観データが融合された、より多層的な効果測定を行うことができる（Berg,1995）。

２．研究の目的

本研究は、未成年時に親を亡くした子どもへのグループによるグリーフケアプログラムの効果測定とプログラム内容の検討、さらにはプログラムや支援の持続的実施のための基盤構築に関する検討を行うことである。

３．研究の方法

(1) 大学生遺児へのグリーフケアプログラムの効果測定

2013 年～2016 年に行った遺児大学生を対象としたグリーフケアプログラムの効果測定を行った。プログラムはグループと個別面接によるグリーフケアグループであった。グループでは死別体験をわかちあう時間を１クール 5 回で合計 3 クール実施し、各クールの前後に複雑性悲嘆質問票と半構造化面接を行った。その中で 1 名の自死遺児大学生に焦点を当てて、事例的に検討を行った。

（2）遺児へのグリーフケアプログラムの検討

あしなが育英会の実施したケアプログラムの参加アンケートとスタッフの参加アンケートの検討を行うと共に、複数のグリーフケア団体の活動内容を調査し、さらに上記の遺児大学生へのグリーフケアグループの実践内容等も踏まえ、子どもへのグリーフケアに重要な視点の検討を行った。

（3）小学生・中学生の遺児へのグリーフケアプログラムのスタッフ体験の検討
　遺児へのグリーフケア活動における初参加のボランティア体験に注目し、ボランティアによる直筆式の振り返り記録をデータとして検討を行った。分析方法は修正版グラウンデッドセオリーアプローチを用いて分析を行った。

（4）研究手法としての質的研究に関する検討
　リゾーム構造や動的平衡の観点から人間を理解し、その人間理解を踏まえた「動的」な観点から研究が行われていくことが重要であることを過去の悲嘆研究や調査事例等を用いて検討を行った。

（5）グリーフケアのための活動基盤の構築に関する検討
　遺児支援を継続的に行うために必要とされる活動基盤について検討を行った。具体的には実際にグリーフケア団体を立ち上げ、持続可能にするための方策について検討を行った。

４．研究成果
（1）大学生遺児へのグリーフケアプログラムの効果測定
　複雑性悲嘆質問票の結果から、グループに参加することで二重過程モデルに類するプロセスを経ながら悲嘆が軽減することが見出された。語りからは、死別した父との関係性にも変化が生じ、自身の人生の物語の中に父と死別体験が含みこまれるようになったことがわかった。それらと並行して、死別体験の意味が変容し、死別体験というものが自身を苦しめる「傷」というものから、「個」を生み出すものであるという受けとめに変化した。つまり、死別体験に取り組むことは悲嘆を軽減し、その体験の意味を変容させるだけではなく、遺児自身全体である「私」を変容させることになるのだ。つまり死別体験の再構成と「私」全体の変化とは平行して生じ、相互的に影響を与えるものなのだということが見出された。

（2）遺児へのグリーフケアプログラムの検討
　子どものグリーフケアにおいて、遺児という存在が何か特別な存在であると誤解したり、「子ども」という状態を正しく理解できていないことが散見される。本来はそれらを包含した「ひとりの存在」として理解し、その存在を尊重することが重要となる。このような援助者側の態度こそが、子どもが本来持つ「自己治癒力」を賦活させる。そのためには子どもが本来持つ力を発揮できるようになる「器」を用意することが必要であり、その中でも「制限」に限定して、守りや枠組みという観点から「器」の役割の重要性を述べた。子どものグリーフケアにおいては死別体験に焦点を当てなくてもグリーフケアが進む場合があるが、その場合においては遊びを中心とした表現が重要で、その表現を促すためにも制限や器が重要となるのである。
　さらに自己治癒力の発生と同時的に生じてくる物語の意義について事例を提示しながら論じた。遺児たちの物語は継時的に変化し続け、自身固有の物語が見いだされることによって自身の在りかた全体を支えるようになる場合があることが見出された。そして「Narrative Based Grief Care」という考えを示した。それは「Narrative Based Medicine」の定義を援用したもので「死別を人生という大きな物語のなかで展開するひとつの物語としてとらえ、遺族を物語の語り手として尊重すると同時に、医学的診断やその援助方法、診断に至らずとも様々な状態像の理解とサポートについても、あくまで援助者側のひとつの物語とみなして相対化し、両者をすりあわせる中から新たな物語が生まれてくることを死別への援助とみなす」と定義した。このような物語の視点からグリーフケアに取り組むことが重要であることが見出されたと言える。

（3）小学生・中学生の遺児へのグリーフケアプログラムのスタッフ体験の検討
　修正版グラウンデッドセオリーアプローチによる分析の結果、6 のカテゴリーと 13 の概念が生成された。参加前には遺児との関わりに対して【具体性無き気がかり】を抱いており、これは死というスティグマが影響するとともに事前研修によってまたそれが強化された可能性が考えられた。しかし実際に関わることで【リアリティある遺児イメージの獲得】に至り、【「子ども」という存在との出会い】にも至った。また【専門性不足による戸惑い】といった困難感を抱いていたが、非専門家であることが遺児に効果的に機能したのではないかとも考察された。そして【先輩ボランティアスタッフのサポート】も得ながら、遺児との相互作用によって【新しい自分の発見】にも至ったが、広義には遺児の真なる姿との出会いも新しい自己の発見であったと言えるということが見出された。

（4）遺族支援における質的研究に関する検討
　遺族支援においては質的研究も重要であるが、量的研究の方が先行している側面がある。質的研究の主な手法は面接調査であるが、その面接調査を実施する際には研究協力者の中に「動き」が生じるため、固定的でない「動きあるもの」が研究データになることを実際の遺児大学生の調査事例等も紹介しつつ提示した。さらにその動きある対象を扱う研究者自

身もデータによって変容させられ、研究プロセス中に新しい視座が生み出される「動き」が生じながら進むことの重要性を指摘した。そしてこのような動きある研究協力者と研究者による関係性を含めた事象を研究対象としていく必要性を論じた。最後に、研究論文が読み手にどのようなものを与え得るのかについても言及を行い、研究協力者・研究者（臨床家）・論文の読み手（研究者・臨床家）の3者の間で生まれる「動き」が「渦」となって広がり、質的研究を成り立たせることになるということが見出された。

（5）グリーフケアのための活動基盤の構築に関する検討

遺児支援を行うために重要なものは、その継続的な活動基盤をいかに築くか、というところにもある。遺児自身は自ら主体的に援助やグリーフケアを求めて行動することはほとんどない。そのため、保護者を通して、又は保護者と共に必要な機関を利用することになる。そのため、グリーフケアを行っている団体をまず立ち上げ、その基盤を生み出して継続的なグリーフケア活動を行うことでその団体の実績と知名度を上げ、子どもではなく大人に周知を図ることが重要である。その上で保護者が遺児を連れて来談する、ということにつなげる必要があった。ゆえに、まずグリーフケア団体として「京都文教大学グリーフケアトポスCo＊はこ」を立ち上げ、成人対象のグリーフケア活動を行った。その際に「配偶者を亡くした方」へのグリーフケア活動を行うことで、そこに伴う「親を亡くした子ども」へのグリーフケアにつなげていけるよう試みた。

さらにグリーフケアは単発で行うだけでは意味が薄く、継続的に援助を続けることが必要にもなる。そのため、立ち上げた団体が持続可能となるための工夫についても検討を行った。持続可能にするためには、大学に付属する団体とすることによって大学院生らを中心に実施スタッフを継続的に集めることができる。また、持続可能にするためには、金銭的な問題も重要となる。そのため、現状では研究ベースで行うことでスタッフへの謝金等の金銭面での持続性も補うことが可能であることが考えられたが、研究ベースから外れた際に如何に持続可能にできるかは課題であると言える。グリーフケアに広がりが見られないのは、グリーフケアが有給の「仕事」として成り立っていないためであり、如何にしてグリーフケアを金銭面も含めた仕事として成り立つ形に定着していけるかが、重要であるということが見出された。

主な発表論文等

【掲載論文】

倉西宏・大日方薫・小林昌幸・藤井茉衣子（2018）死別体験の再構成と「私」の変容―青年期を迎えた自死遺児へのグループと個別面接によるグリーフケアの意義―(査読付き) 心理臨床学研究　36巻1号 pp15-26　査読あり

倉西宏・八木俊介（2018）遺児へのケアプログラムにおけるボランティア体験―初参加スタッフに焦点を当てて―（査読付き）　日本福祉教育・ボランティア学習研究学会研究紀要 30巻 pp19-31　査読あり

倉西宏（2021）子どものグリーフケアにおける基本的視座-存在として尊重、制限、物語を中心に-　グリーフ＆ビリーブメント研究　第2巻　pp19-25　査読無し

倉西宏（2022）「動き」とリゾームから見た質的研究～動的研究という観点～ 臨床心理学部研究報告 14 pp25-35　査読あり

倉西宏（2022）京都文教大学グリーフケアトポス「Co ＊はこ」の立ち上げと今後について 臨床心理学部研究報告 14 pp159-164　査読なし

【学会発表】

倉西宏（2018）あいまいな喪失後に生じた死別と喪の過程―両親の離婚によって離別した親を亡くした大学生へのグリーフケアグループ―　　第37回日本心理臨床学会

鈴木耀大・倉西宏（2018）両親の離婚を経験した子どもの無力感とそのプロセス ―罪悪感・怒り・許し・諦めとの関連から― 第37回日本心理臨床学会

Kuranishi,H(2019)The dialectical mourning process for loss from death after having experienced a previous ‘ambiguous loss’ International Association for Jungian Studies Regional Conference

倉西宏（2020）子どもの自己治癒力～物語と主体を生み出す力～　第3回日本グリーフ＆ビリーブメント学会学術大会　シンポジウム 3 こどもの喪失体験とグリーフサポート　シンポジスト

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 倉西 宏 ， 大日方 薫 ， 小林 昌幸 ， 藤井 茉衣子	４．巻 36(1)
２．論文標題 死別体験の再構成と「私」の変容 ： 青年期を迎えた自死遺児へのグループと個別面接によるグリーフケアの意義	５．発行年 2018年
３．雑誌名 心理臨床学研究	６．最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 倉西 宏 ， 八木 俊介	４．巻 30
２．論文標題 遺児へのケアプログラムにおけるボランティア体験 ： 初参加スタッフに焦点を当てて	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要	６．最初と最後の頁 19-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 倉西宏	４．巻 第2巻
２．論文標題 子どものグリーフケアにおける基本的視座-存在として尊重、制限、物語を中心に-	５．発行年 2021年
３．雑誌名 グリーフ＆ビリーブメント研究	６．最初と最後の頁 19-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 倉西宏	４．巻 14
２．論文標題 「動き」とリゾームから見た質的研究～動的研究という観点～	５．発行年 2022年
３．雑誌名 臨床心理学部研究報告	６．最初と最後の頁 25-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 倉西宏	4．巻 14
2．論文標題 京都文教大学グリーフケアトポス「Co ＊はこ」の立ち上げと今後について	5．発行年 2022年
3．雑誌名 臨床心理学部研究報告	6．最初と最後の頁 159-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 倉西宏
2．発表標題 子どもの自己治癒力 ～物語と主体を生み出す力～
3．学会等名 グリーフ＆ビリーブメント学会（招待講演）
4．発表年 2020年

1．発表者名 Hiroshi Kuranishi
2．発表標題 The dialectical mourning process for loss from death after having experienced a previous ‘ambiguous loss’ -Through the narratives of Japanese college students who lost their parent to death after their parents’ divorce.-
3．学会等名 The 2019 International Association for Jungian Studies Regional Conference（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 倉西宏
2．発表標題 あいまいな喪失後に生じた死別と喪の過程 －両親の離婚によって離別した親を亡くした大学生へのグリーフケアグループ
3．学会等名 第37回 日本心理臨床学会
4．発表年 2018年

１．発表者名 鈴木耀大、倉西宏
２．発表標題 両親の離婚を経験した子どもの無力感とそのプロセス ―罪悪感・怒り・許し・諦めとの関連から―
３．学会等名 第37回 日本心理臨床学会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関